



守りたい幸せ

鳥取県立米子東高等学校 2年 角 來夏

ボーペンニャン。これは、ありのままを受け入れる言葉。素晴らしい機会を頂いた私達の出会いの日から暫しの別れまで、この言葉がずっと心の中に、あたたかく灯り続けていた。

ラオスの人々は皆、物腰が柔らかくにこやかで、信心深い。発する言葉の全てが穏やかで、誰もが自然を敬う。私は彼らが大好きだ。

そんな彼らに対して生まれたのは、彼らを「助けたい」とは少し違う、「共に生きたい」という思いだった。安全で恵まれた国に暮らす私にとって、異国の地で生まれたこの感情はとても新鮮で、直感的に、この気持ちを大切にしようと思った。

ラオスを含む発展途上国は、更なる経済発展を目指す。より便利な生活を、人は望むのかもしれない。しかし、人々の愛するラオスの有りようは、先進国が掲げる「発展」を急ぎすぎたら、失われてしまうような気がした。

何が彼らに幸せをもたらすのか、私にはまだ分からない。自身の幸せすら模索中の私には、荷が重い。それでも考え続ける中で、「共に生きたい」という気持ちは、彼らの幸せに寄り添いたいという心からの願いだったのだと気付いた。彼らの傍で、より良い未来を探したい。自分の気持ちに、初めて自信が持てた。

私にチャンスを与えた作文「輝く未来の礎を築く」。大切な皆との出会い。愛しい時間と言葉。ありのままを受け入れ、大好きな人達と共に生きることこそが、ラオスから教わった、守るべき幸せなのかもしれない。